【佳　作（環境生活部長賞）】

感謝が繋ぐもの

岩沼市立岩沼中学校
三年　大友（おおとも）　菜々夏（ななか）

二〇一一年三月十一日。私が住んでいる宮城県は、東日本大震災で大きな被害を受けた。建物が壊れる。人の命がなくなる。津波は、私たちの心に大きすぎる傷をつくった。

私は、幼いころから海が好きだ。どこまでも広がっているような青くて広い海は、見ているだけで私を少し強くなった気分にさせてくれる。

しかし、そんな海も時には恐ろしい顔を見せるのだ。当時の私は三歳で、はっきりとした記憶は残っていない。それでも、ニュースで震災の映像を見た時、被害にあった方のインタビューに耳を傾けた時、胸が苦しくなる。普段のおだやかな海からは想像もつかない津波という姿を見て恐怖を感じる。だからこそ考える必要があると思ったのである。東日本大震災を幼いながらに、その場所で体験した一人として。どんな事が被災者のみなさんを苦しめたのか。

いちばんに思いついたことは「断水」だ。最も不便だったこと、と言っても過言ではないと考えている。

人が生きるために「水」は欠かすことができない。のどが渇いた、温かいものが食べたい、体が汚れた、トイレに行った。どんな場面でも水は必要だ。人の体の約六割は水分であり、水分を摂らないと脱水症状を引き起こす。水が不足すると、命に関わってくるのである。そんな中、断水は続いた。

のどが渇いた時にすぐに水を飲めること。寒い時には温かいスープをつくれること。お風呂に入れる、トイレを流せる。蛇口から透明で安全な水が出る――。あたりまえではないと分かっているつもりだった。しかし、心のどこかで「私の周りでは起こらない」と思う自分がいた。楽観視していたのだ。

「あたりまえではない」と、再確認した今、私には何ができるだろう。何が求められるのだろう。

水を大切にする、という意味ではもちろん節水だろう。皿を洗う時や歯を磨く時、少し意識するだけで十分だと思う。それこそ、「塵も積もれば山となる」ということわざのように、「少し」が集まるだけでも、大きなものになるはずだ。

しかし、節水だけでは足りないと私は思っている。水を大切にする、その考え方は持つべきだ。それでも「大切にする」だけでは足りないのではないだろうか。

私たち人間は、動物や植物の命を頂いて生きている。命に感謝して食べる、ということは、誰もが聞いたことがあるだろう。それと同じように、あたりまえのように私たちの身近にある「水」にも「感謝」するべきだと思ったのだ。

蛇口をひねれば水に困らない日本人。その一方で、世界に目を向ければ、重いバケツを抱え、長い道を往復しなければ水を得られない人々。水道が通っていない地域の人々は、私たちよりも水を大切にしているだろう。得る手段は異なっても、「水を大切にしたい」というその感覚は誰でも持つべきだと強く考える。

水は限りある資源。水は生きるために必要。この二つはどちらも事実だ。だからこそあたりまえだと思わないでほしい。それは急に、目の前からなくなるかもしれない。東日本大震災は、そのことを私たちに教えてくれたはずである。

あの日、震災が起こることを誰が予想しただろう。誰も予想できない事態は、今すぐにでも起こるかもしれない。水不足は、今も世界で起こっている。水に対する「感謝」が、「節水」に繋がればきっと世界は変わる。

私はそう信じている。だからこそ、私は水に感謝する人になる。そして、そのような人が広い広い海を渡って世界中に増えることを願っている。